

例会要旨

2008年5月10日(土)

於 筑波大学東京キャンパス

野菜生産地域における女性農業者の果たす役割 —磐田市旧豊田町のチンゲンサイ農家を事例に—

井口 梓(筑波大学生命環境科学研究科・院生)

本発表は、静岡県旧豊田町を事例地域として、野菜生産地域における「農業労働力の女性化」から「女性による主体的な農業」への変化の実態を踏まえ、女性農業者の果たす役割についてチンゲンサイ生産の普及活動との関わりから検討した。特に地域におけるチンゲンサイ生産の位置づけと、地域と家族内における女性の位置づけの変化のプロセスに着目した。

旧豊田町におけるチンゲンサイ生産は当初、野菜産地の強化よりも、第2種兼業農家の女性を対象として「主婦の月給取り農業」を推進し、地域農業を活性化させようとしたものであった。しかし、これに参加した女性達は家庭菜園の規模にとどまらずチンゲンサイの生産量を増やし、その産地化を成し遂げた。同時に、生産組織や勉強会を通じて生産者同士の結びつきを強め、女性を中心とする生産空間を構築することに成功した。こうしたプロセスの中で、女性達は家族内や産地内において「農業者」や「経営者」というアイデンティティを獲得し、女性が野菜生産地域を再編成していくことが明らかとなった。

明治・大正期の鳥瞰図に描かれた松島

中西僚太郎(筑波大学人文社会科学研究所)

明治・大正期に作成された陸前松島の鳥瞰図(「松島真景図」)を題材として、今日につながるその景観(風景)の見方の形成過程を考察した。「松島真景図」は、明治21年に作成が開始され、明治30年代初めにかけて土産品として盛んに作成されたが、その背景には、明治20年末に塩釜まで鉄道が開通したことによる観光客の増加があった。「松島真景図」の構図は、陸から海を眺めたものがすべてであるが、画面の左右に松島海岸と塩釜市街を同等に配置した構図(I類型)と、画面の中央に松島海岸を大きく描き、右隅に塩釜市街を小さく描く構図(II類型)とがある。I類型は近世の絵画や版行図に多い構図で、明治20年代初頭のものにしかみられないが、II類型は明治・大正期の大部分のものにみられる構図である。II類型の構図が多い理由としては、明治期以降観光地としての塩釜の地位が低下する一方、松島海岸の地位が上昇したことがあるほか、塩釜からの汽船が航行する松島海岸を表現するには、この構図が効果的であったことが考えられる。そして、この構図に示される松島の見方は、今日のその景観の見方に引き継がれてきたといえる。